八代市長　中村博生様

八代市厚生会館の利活用についての

提言書

2022年9月

八代市厚生会館のホール再開を求める会

はじめに

八代市厚生会館の「ホール再開中止」が、なぜこれほどまでに市民の間で議論になり続けているのでしょうか。

確かに、建造物としての劣化などに伴う修繕の必要があり、八代市の予算にも「限り」があって、維持していくことは簡単ではない、と言われます。また、一部には厚生会館に替わる新たな大型ホール建設という思惑が根底にあったかもしれません。ただ、いずれにしても、主にそうした理由で「再開しません」とあっさり決められたことに対して、市民は強い違和感を持ちました。

八代市厚生会館は、建築史的にも、その諸設備の点でも、県内有数の高いレベルを備えたホールです。そうした空間で演奏会や演劇、イベントなどが行われ、市民にとってはそれぞれの人生の中で大きな「記憶」を伴った場所となりました。それを「ノスタルジー」と切って捨てる人もいますが、その「記憶」は人々にとって大きな「財産」になり、さまざまな場面で生かされています。そして、そうした「記憶」を次の世代も当然持つことができてほしいと市民は願っています。引き継ぎたいのです。

厚生会館は、八代市が実施した二回の大規模改修・耐震補強工事が奏功し、熊本地震に耐え、現状でも震度 7 までの地震に耐えるとされています。完成から約 60 年が経ち、修繕や設備の一部更新が必要なのは当然ですが、その躯体はこれからも使用可能です。

私たち「八代市厚生会館のホール再開を求める会」は、この八代市厚生会館を市民にとっての守るべき「宝」と考えています。今回、厚生会館の利活用について、市民の目線でさまざまに考え、地域の将来像や市民と行政との協働作業も念頭に置きながら、提言書をまとめました。この提言書が十二分に生かされることを願ってやみません。

「八代市厚生会館の利活用についての提言書」 contents -目次-

1. 八代オリジナルの、新たな市民文化の創造

2. 中心街機能の核として ～コンパクトシティ としての観点から～

3. 「ホール」観の アップデート

4. 未来世代への投資

5. 多様な歴史文化遺産 の保存・継承と活用

6. 観光・商業振興

7. 市民参加で利活用の 可能性を探る ～ワークショップの開催～

8. 改修費の見直し

八代市厚生会館

1. 八代オリジナルの、新たな市民文化の創造

1-1　「蘇る名ホール」

「近隣の自治体と比して」デジタル最新設備を備えたホールを「右に倣え」的に整備することは、何ら特色を産まないばかりか、「すぐに古くなる」という終わりのない競争に足を踏み入れることでもある。

従来の厚生会館ホールの特色、「温もりのある、一体感のある上質な音響」をそのまま継承することで、「蘇る名ホール」としてのオンリーワンの付加価値を生み出す。

1-2　「アナログホールの殿堂」として

演者の力量がダイレクトに伝わるアナログホールの特徴を更に強調するために
音響設備を真空管アンプに改修することは可能。その場合、「日本で唯一の真空管アンプのホール」となる。

1-3　「築 60 年のホール」で最先端の価値を生み出す「フェス」の開催

今、新たな価値創出の場として「フェス」が注目されている。フェスは単なる「音楽イベント」ではなく、複数の場所で同時進行する種々のジャンルのイベントが展開され、来場者がその中で自由に楽しむことができるというものである。

八代の文化施設と史跡と市街地の中心にある「厚生会館ホール」を拠点に、様々な種類のイベント展開が可能となる。

※参考

先駆的なブランドはなぜ「野外フェス」でファンと交流するのか？新たな価値創出の場としてのフェス

https://ampmedia.jp/2017/07/31/outdoor-festival/

1-4　「レトロ」「アナログ」「ローテク」「不便」から創造する価値

デジタルネイティブ世代にとって、「レトロモダン」「昭和テイスト」「アナログ感」はブームを超えた魅力あるジャンルとしてすっかり定着している。完成されたデジタルシステムが当たり前のアベレージである世代にとって新鮮な、「レトロ」「アナログ」「ローテク」「不便」を戦略的に演出、発信することによって、厚生会館への来訪そのものを「体験・目的化」することができる。

1-5　**人材発掘・公募**

八代市文化ホール等あり方検討委員会でも指摘があったように、文化施設の運営を２～３年で異動する市職員に任せるのには無理がある。「市民の創造力の向上」という長期的な目標の実現のためには専門職的な立場のプロパーがある程度の権限を任されて、継続性を持って運営に当たることが必須である。

公共施設に、適切な人材を公募で得たことから、効果的に稼働し始めたという例は多い（参考例：つなぎ美術館、ちとせぴあホール)。

音楽・文化・芸術に精通した八代市ゆかりの人材もあり、市民や民間事業者など広く呼びかけて人材発掘を行うことは、厚生会館を蘇らせるために、初めに取り掛かるべき作業である。

1-6　**「語り継ぐ」**

厚生会館の歴史、「市民格を向上させる」という当時の市長の想いと、それに応えた名建築家、ホール設計の第一人者、そして本場ウィーンのホールを視察した市の職員、新しいホールに文化の光をともそうと協力した多くの市民‥‥「厚生会館」はもはや八代市の「史跡」である。厚生会館を残すことは、市民の誇り、愛着（＝civic pride）の醸成、記憶の継承に大きく寄与する。

厚生会館のホールを再開させることは、単なる「一施設の再開」ではなく、八代オリジナルの、新たな市民文化の創造そのものである。

2.中心街機能の核として～コンパクトシティとしての観点から

2-1　八代市では、人口減少・超高齢化社会に適応可能なまちづくりとして、行政・医療・文化施設が集中している中心市街地の「コンパクトシティ」としての機能維持がますます重要になっていく（参考例：熊本市立地適正化計画)。

2-2　高齢者を中心とした中心部への回帰現象（行政・医療・介護施設の充実、交通網）が進行している。

2-3　人口増・車社会を前提とした文化施設の郊外への分散が限界に近づき、転換点を迎えようとしている。

2-4　「ホール」機能が中心市街地に残ることで、全世代の交流促進につながる。高齢者の「生きがい」の創出、異世代交流による伝統文化、伝承の継承など。

2-5　厚生会館～八代城跡～お祭りでんでん館～博物館～松浜軒～澤井家～図書館のエリアは八代市歴史文化の集積地。中でも厚生会館は芝生広場も含め今後コンパクトシティ構想に欠かせないランドマークの一部として、活用の幅を広げる可能性に溢れたエリアである。

3.「ホール」観のアップデートの必要性

3-1　他の自治体でも、「ホール」の役割を多角的に捉えなおしていくトレンドがみられる。旧来の「ホールの座席〇〇人、〇〇円のチケットを〇〇枚販売して採算ラインに乗る、八代市で売れるのは〇〇枚」などという、ホールの内側の利活用だけの議論からの脱却が必要。

3-2　厚生会館はホールのみならずホワイエ・外部空間はじめ、点から線へ、線から面へと拡大して利活用できるという恵まれた場所性を備えている。

3-3　「公演」を受け入れる「箱」から、「企画・発信」の「拠点」としての機能を整備する（参考例：熊本県立劇場のアートキャラバン、ホワイエサロンコンサート）。

3-4　ホワイエ、ピロティ、スロープ、バルコニー、芝生広場を日常的な市民の集いの場として開放する。お祭りでんでん館、松濱軒、八代城跡、図書館、博物館などへの人流拡大が期待できる。

3-5　周辺施設、学校、商店街、校区と連携した運営委員会を設置する。

3-6　厚生会館を拠点に周辺史跡、施設、商店街へと拡大させる形でのフェス、マーケット、コミケなどのイベント開催により、相乗的な経済効果が実現できる（参考例：街全体を一つのテーマパークと見立てた福井市の「ワンパークフェスティバル」）。

3-7　文化施設の広域利用の観点から、県南の名建築・名ホールとして発信し、利用対象者を広く設定しなおす（例：八代市立博物館・つなぎ美術館）。

3-8　熊本城ホールなどの大規模なホールと棲み分けを指向する。

「大規模なホールでないと、（ギャラの高い）一流の公演を招聘することは不可能」という思い込みが「旧いホール観」そのものと言える。

中規模の採算ラインで、一流の格式を備えた「厚生会館」だからこそ呼ぶことのできるコンテンツの層は厚い。

他の大小ホールにない、使い勝手の良さ、実績、ホールとしての「格の高さ」を PR し、良質な公演を成功させれば、エンタテイメント業界の情報ネットワークに乗って、良いコンテンツの提案が連鎖していく。

4. 未来世代への投資

4-1　八代市が令和４年３月に策定した「八代市教育大綱（第２期)」には、「郷土の文化・伝統に親しむまちづくり」として「市内各地に数多く伝えられている歴史資料、史跡、建造物、伝統行事などの有形無形の貴重な文化財の保存・整備、継承、公開・活用を進めます。また、優れた芸術を鑑賞する機会を数多く創出し、新たな市民文化の想像に寄与します」とある。

厚生会館は、近代建築を代表する貴重な建造物としてのみならず、未来世代へ優れた芸術を鑑賞する機会を与えながら「財産」として残すべきである。

4-2　「フォーマルなホール」の重要性

一流の演者をきちんと評価して、相応しい「舞台」を用意し、礼儀を尽くすこと「市格」を示すことである。八代では厚生会館が唯一の場。「教育の機会均等」の観点からも、八代の子供たちがフォーマルなホールでの礼儀やふるまいを学ぶ場を継承していく責任がある。

4-3　八代で唯一の「能舞台」

伝統芸能に配慮して、厚生会館には能舞台、鏡板（松羽目)、橋掛り（花道）などを完備している。中でも「能」は八代における伝統芸能の柱であり、松井家の能面・衣装は日本有数のコレクションとして知られている。また、能を始め伝統芸能を次世代の子供たちに体験させ、継承していくことは、文化教育施設として、伝統芸能に対応した設備を備える厚生会館の重要な役割である。

4-4　「SDGs 未来都市」の名にかなう

八代市は令和４年５月、「SDGs 未来都市」に選定された。「21 世紀に残すべき名建築」「市民の財産である名ホール」をただ、「古くて改修にお金がかかるから」とあっさり棄てて「採算性と利便性を備えた」新しいホールを建設するのではなく、修繕しながら愛着を持って使い続けることこそが「SDG s 」の理念にかなうと言える。

4-5　「運営方針（平成 28 年 3 月）」の理念は大切に引き継ぐべきである。

平成 28 年 3 月に策定された「八代市厚生会館及び千丁・鏡文化センター運営方針は「事業を実施することが目的にならないよう、入場者数や収益などの短期的な目標だけでなく、事業の波及効果や地域への影響、関係文化団体等の水準向上など、長期的な視点を加味した基準による適切な評価を積み上げていくとともに、そのフィードバックを怠らないことでより充実した事業につなげていくものである」

「鑑賞の提供だけにとどまらず、教育や体験、普及や住民参加という形態で事業を実施している。これらの事業の成果は、具体的な数値として現れにくいものであるが、舞台芸術に対する理解の向上、地域文化の担い手の育成という観点から継続していく必要性の高いものである」

厚生会館ホールは、それ自体が八代市民にとって、近代の重要な史跡であり、記憶遺産であり、今なお地域づくりや経済活性化、教育文化振興など多様な可能性を持った社会教育施設である。「長期的な価値を大切にする」という、八代市の素晴らしい運営方針をこれからの世代にも是非引き継いでいくべきである。

5. 多様な歴史文化遺産の保存・継承と活用

5-1　厚生会館がある中心市街地は、江戸～令和までの歴史的建造物、名建築、文化財の集積地であることから、「八代城跡群保存活用計画」「歴史文化基本構想」「地域活性化・住民生活に光をそそぐ交付金事業」等に基づき、具体的に、市民に見える形でその価値を保存、公開、継承、活用していく。（例：外堀遺構の表示、ガイダンス機能、城跡のビューポイントとしての活用。）

5-2　厚生会館の、八代城跡と対峙する「外部空間」を拡大していく環境デザインの実現は、景観重点地区の整備に大きく貢献する。

6. 観光・商業振興

6-1　従来の観光スタイルはバスツアーに参加したり、レンタカーを借りたりして、複数の地域を巡るのが主流であった。現在は少人数・個人で「一つのところに滞在して、地域ならではのコトを体験する」「滞留型観光」が主流になってきていることを踏まえ、また、八代市立博物館や津奈木美術館などは、八代市の想定以上に市外からのビジターに高く評価されており、両館を小旅行的に回遊する県内の利用者は多い。県南の文化施設・文化ゾーン回遊のモデルコースの提案は、非常にポテンシャルが高く、研究してブラッシュアップしていく価値がある。

6-2　名建築・史跡・文化財の集積地
江戸～昭和～平成～令和の時代の建築の歴史を全て網羅できる特異な地区。博物館、お祭りでんでん館、松浜軒、八代城跡、裁判所、警察署、八代市役所新庁舎など。コンパクトなエリア内で回遊可能である恵まれた環境こそ、新たな観光資源となる。

6-3　日本人観光客向けの「県南観光ツアー」モデルコースの拠点として
国内ツアーの日本人観光客が宿泊・滞留して消費する一人当たりの金額はインバウンド観光客の 10 倍との試算もある。八代市は、博物館や熊本高専八代校などに世界中の専門家と対等に論議できる優秀な人材を持っており、そのソフトパワーを強みにして、「歴史・文化」をテーマにした観光ツアーのモデルコースの構築、「八代の創造力を発揮した歴史文化モデルコース」の発信が可能である。

6-4　名建築ブーム
建築物愛好ブームもあり、全国の建築関係者、建築マニアを呼び込む可能性も生まれる（例：TV ドラマ「名建築で昼食を」)。～「DOCOMOMO」選定建築物の認定プレートの設置、公開。

6-5　建築セミナーや学会の開催、見学モデルコースの設定
熊本高専八代校の授業では、厚生会館などの建築物の見学が実施されている。また、コロナ禍で実現されなかったが、お祭りでんでん館を設計した平田氏などを招聘して

の建築セミナーは計画されていた。前述したように、400 年の時代の名建築の集積地である八代市は、厚生会館で定期的に「建築」をテーマにしたモデルコースの提案やセミナー、学会の開催が提案できる。参加者はそのまま滞留型観光客となり、中心市街地及び周辺文化財・観光エリアへの誘導も可能である。

6-6　新しいスタイルの演奏会

これまでの「公演」像に縛られない柔軟な利活用により、「特別感」「付加価値」を感じさせ、市外からの人流につながる公演が低予算で可能となる。（例①：著名音楽家のソロ、デュオ、アコースティックコンサート。例②：桂新右衛門やその一門による寄席。コンパクトな本格ホールでの公演で、人気番組「笑点」に勝るとも劣らないステージも可能　例③：ホワイエで低予算・気軽・アットホームな公演提案が可能に）

6-7　商店街への回遊拠点

5-1～5-6 までの提言は、すべて中心商店街とタイアップすることで、人流を導く拠点として利用できる

7. 市民参加で利活用の可能性を探る～ワークショップの開催

7-1　厚生会館についての市民の意見の反映として、「旧来型のホール」に限定した利活用を検討した検討委員会やアンケートでは不十分である。厚生会館ホールのポテンシャルを捉え直し、ワークショップを広く市民に呼び掛けた上で開催して、丁寧に住民参加で「厚生会館のあり方」を検討するべきである。

7-2　厚生会館は別館解体に伴って、市民の知らない間に電源などの設備が壊され、さらに「根耳に水」のように「ホールの再開中止」が発表された。一方で八代市は「採算性や利便性を備えた新しいホールの整備は必要」と繰り返し述べている。現在、八代市も人口減の高齢化社会を迎え、予算状況も厳しいと言われる中、「採算性のある（＝座席数の多い)」ホールを新設して抱え込むことは、本当に市民が望むことなのか。歴史文化施設の集積地にあり、ホールのみならず、様々な利活用の可能性に満ちた厚生会館と、姿も予算もビジョンも判らない「新しいホール」と、その選択は市民に諮られていない。市民にとって、文化にとって、「これからのホールとは」「どんなホールが欲しいか」など、市民と行政が同じテーブルについて話し合う場ができれば、それこそが「八代オリジナルの、新しい文化の創造」ではないか。

8. 改修費の見直し

8-1　**「改修の目的」の見直し**

厚生会館の改修費用見積もり 20 億円の内容には、座席の減数、エレベーター、舞台設備・空調・照明を一体的にコントロールする最新設備への更新が多額の見積もりとなって含まれている。これらの試算はホールの「あり方検討会」にも途中で提示されており、すなわち、市が「厚生会館の再開の方向性＝最新の設備への更新」などと勝手に決定して作成した試算となっている点が問題である。「コンパクトでアットホームなホール」として設計された座席数を市民に理解してもらう努力はなされたのか。市民が望む「厚生会館の再開」とは何なのか。利活用の可能性を市民参加で広く探った上で、「市民が望む『改修』の目的」を設定しなおすべきである。

8-2　**改修費の再精査**

芦原事務所にまず相談し、芦原事務所または他の実績ある事務所に改めて積算を依頼して、現在提示されている改修費（改修内容）と比較検討するべきである。

8-3　**巨額な改修費用が独り歩きしないような、現実的な改修方法の研究**

天井は、例えば日本耐震天井施工協同組合による診断を経て改修方法の検討ができる。また、財政難の中、改修時期を迎えた公共ホールは全国の自治体にあり、少ない予算で有効な改修内容を提案する専門業者もある。吊り天井も、張り換えではなく、既設補強で現行法に適合させる方法があり、適切な業者の選定が工費と工期の縮減につながる可能性がある。（参考例：「light stage」特定天井の改修方法について http://lightstage.co.jp/tokuteitenjou_kaisyu/）

8-4　**「価値の維持・継承」を前提とした改修**

DOCOMOMO が八代市厚生会館を後世に残すべき近代建築として認定した大きな理由のひとつに「オリジナルのデザインを驚くほど残している」という点がある。改修にあたっては専門家の意見を聞き、建物の価値を損なわない配慮と現状の意匠の維持が必須である。また、天井改修時に既存の音響効果を維持できるような配慮も必要。

8-5　**修繕のための優先順位の決定**

8-6　**資金調達方法の再検討**

各種交付金を精査するほか、令和 7 年度までは期間延長された合併特例債を使うことができる。クラウドファンディングなどの手法も検討対象とすべきではないか。

8-7　**後世に継承するための努力**

長寿命化計画（令和 2 年度までに策定すべきもの）が未策定の場合、これに相当する計画の策定を急がなければならない。日常的に点検・修繕を行う丁寧な管理・運用の実施も必要。

最後に

八代市では現在、第２次文化振興計画を策定中だが、本提言を踏まえ、

「八代市厚生会館のホール再開」を位置付けていただくことを切に希望する。